

地域資源を活用した県内企業の新商品・新役務の開発、販路拡大等の経営革新の取組を支援します。

【お問い合わせ】

あきた企業活性化センター/
経営革新・設備資金担当(018-860-5702)まで。

秋田の技術で 国内メーカーをリードする 株式会社 大榮木工

シンガポールで昨年3月、
メイドイン秋田の製品が
「日本初」の快挙を成し遂げた。

国内屈指の木製建具メーカー

昨年、能代市の大榮木工が、国内初となる2時間耐火の内装用木製防火戸の開発に成功した。

同社は、昭和22年創業の木製建具の専門メーカー。天然秋田杉の製材で栄えた木都・能代で、障子やふすま、木製ドア、木製防火戸などをオーダーメイドで製造・販売している。その技術の高さは、製品の納品先からも一目瞭然だ。京都迎賓館、成田国際空港外務省貴賓室、衆議院議長公邸、帝国ホテル、ザ・リッツカールトンホテル東京、ホテルオークラ、伊勢神宮、浅草寺、永平寺、知恩院など、名立たる建築物に建具を納めている。

確固たる実績を重ねる一方、技術向上への挑戦の手を緩めない。平成8年から取り組むのが木製防火戸の開発だ。

金属より強い木製防火戸

建物の開口部で火災の延焼を防ぐ防火戸。金属製が多いが、建築業界には防火戸は「金属」より「木製」という根強い意見がある。スチールドアは火災時に一定の温度に達すると変形、溶解するのに対し、木製耐火ドアは、木が炭化し、完全燃焼することはない。日本で防火戸と認められるには、法律に基づく20分または60分の耐火試験に合格し、国土交通大臣の認定を受ける必要がある。同社は試作を繰り返し、平成9年に木製ドアで試験をクリアした。

平成22年には販路拡大のためにシンガポールに進出。そこで、北米やヨーロッパ、シンガポールでは、耐火試験の合格ラインが最長で120分までであることを



同社製品。右のドアは、昨年10月に東京で開催された「森と木の国あきた展」で披露した「木質系二時間耐火防火戸」。木製ならではの耐火性、デザインや木目の美しさ、防音性の高さを兼ね備えている。

知る。現地での引き合いもあり、「120分の壁」に挑む決意を固めた。しかし、「わざわざ海外の基準に挑む意味があるのか」「60分でやっと。どうやって120分をクリアするのか」など社内には疑問の声もあった。

大震災から決意を新たに

そうしている間に発生したのが東日本大震災。「未曾有の大災害で同時多発的に火災が起これば、消火に手が回らなくなる。せめて防火戸の耐火時間が長ければ、救える命は多いはず」。そう実感して、能登一志社長は改めて挑戦を決意した。開発資金として利用したのが当センターの「あきた企業応援ファンド事業」だ。何度も試作を繰り返し、昨年挑んだシンガポールでの耐火試験にて120分をクリアし、日本のメーカーとして初めて現地の認定を受けた。「今後は海外での販売のほか、首都直下型地震に備えて防火性向上が叫ばれる東京都などに売り込み、メイドイン秋田の底力を発揮したい」と能登社長。さらなる挑戦が始まっている。

株式会社 大榮木工

〒016-0122
秋田県能代市扇田字扇淵12-2
Tel.0185-58-3400
Fax.0185-58-3402
<http://www.daieimokko.co.jp/>



木製ドア、防火戸の内部には、用途に合わせてさまざまな工夫が施されている。写真は内部の説明をする能登社長。



社員は20代、30代が多い。同社の3代目である能登社長も30代だ。技術を磨きつつ、若手の育成や技術継承にも力を入れてきた。



国内外から集めた希少な木材を多数ストック。皇居の門や社寺仏閣など文化財の修復も手掛けている。